

## <内 政>

### ●東部の都市ベンガジで全土解放の記念式典を開催した国民評議会

国民評議会は、2011年10月23日、東部の都市ベンガジのキシユ広場において全土を解放した記念式典を開催した。首都トリポリではなく、国民評議会が過去8ヶ月に亘るカダフィ政権との戦いの期間に本拠地としてきた東部の都市ベンガジでわざわざ記念式典を開いた点は、今後の同国の内政を見るうえで注目される。尚、式典の様子はテレビ中継された。

高揚する観衆の前に立ったアブドゥル・ジャリール議長は、まずカダフィ政権との戦いに勝利したことを神に感謝するお祈りを捧げた後、詰めかけた市民に概要次のように語り、寛容さや忍耐、慈悲の大切さを訴えると共に新生リビアがイスラム法を基本とする国家となることを説明した。

- ① 法を順守しお互いの財産を尊重せねばならない。
- ② 皆さんに心の中から嫌悪を取り除くことをお願いしたい。それこそが、(新生)リビアの樹立に不可欠なものである。
- ③ 寛大な精神と忍耐と正直な気持ちが重要となる。
- ④ 我が国はイスラム国家であるのでイスラム法が基本的な法源となる。イスラムの教えに矛盾する既存の法律は無効となる。
- ⑤ 銀行の貸出金利には上限が設けられ、新生リビアではイスラム銀行が設立される。リビア人男性が持つことのできる妻女数の制限も撤廃される。

また国民評議会のマフムード・ジブリール暫定首相は、ヨルダンで開かれたワールド・エコノミック・フォーラム主催の中東特別会議で、今後のリビアの課題などについて次のように演説した。

- ① 本日、国民評議会はリビアが8カ月に及ぶ厳しい内戦を経て独裁から解放されたことを宣言する。
- ② 戦闘で亡くなられた殉教者に敬意を表したい。
- ③ 我々は資金も武器もなかったが、(強固な)意思を持っていた。
- ④ リビアのために戦った若者の勇気ある行為に敬意を表したい。
- ⑤ 国土の完全解放が実現したので1週間から1ヶ月以内に暫定政府を形成する。
- ⑥ この暫定政府が新たな(暫定)国民議会の選挙を監督する。
- ⑦ (暫定)国民議会は憲法草案を策定し、(本格的な)国民議会の選挙を実施する。
- ⑧ 国民議会の議長が、大統領選挙で大統領の選出されるまで、国家元首を代行する。
- ⑨ 大統領選挙の実施後、リビア国民は過去数十年で初めて国民により自由に選出された政府を持つことになる。
- ⑩ 当面の課題は、まず、現在国中に散らばっている武器類の回収である。これは、数万人が武器類を持っている国家の安定を回復するには不可欠なものである。容易なことではないが、国民評議会の決意のほどを試すものとなる。我々はリビア国民の良識に期待している。
- ⑪ 次には、社会の全階層を新生リビア造りに参加させるために和解プロセスを

進めることが重要となる。

- ⑫ 革命の始まったベンガジなど東部の人々、西部の首都トリポリの人々、カダフィ体制の打倒に参加した様々な政治勢力の人々を全て和解プロセスに含める必要がある。
- ⑬ 将来に向かっては、リビアは、世界の全ての若者が共有する地球文化の枠内で、新たな価値を取り込んだ新たな未来を計画せねばならない。
- ⑭ 我々の持つ古い考え方は適していないので、若者の期待に沿えるように考えを変える必要がある。もし我々がこれを怠れば、我々は若者が繰り返し抗議のために道路に集まるさまを目にすることになる。

● 暫定首相に学識経験者で温和且つ清廉なアブドゥルラヒム・キープ氏を選出  
国民評議会は、2011年10月31日、暫定政府の首相を選ぶ投票を行い、前日（＝10月30日）遅くに改めて辞任を公式に表明したマフムード・ジブリール氏の後任として学識経験を持ち温和且つ清廉なアブドゥルラヒム・キープ氏を選出した。

新・暫定首相の任期は、制憲議会選挙が実施される2012年6月末までの8か月間となる。アブドゥルラヒム・キープ新・暫定首相がまず取り組まねばならないのが、今後最長1か月以内での暫定政府の閣僚の任命である。その後は様々な勢力から成る国民評議会を一つにまとめつつ、国内に数多く残された武器類を回収しながら各地の戦闘員の社会復帰や軍・治安部隊への編入を進め、さらに憲法作成委員を選任の上、憲法を策定して国民投票に付し制憲議会選挙につなげることである。

アブドゥルラヒム・キープ新・暫定首相は、当選後の記者会見で概要次のような抱負を述べている。

- ① 組閣作業は、これまで明らかにされている期限に間に合うようにしたい。
- ② 新政権は人権を尊重して行きたい。人権侵害のない国家を樹立したい。
- ③ 移行期には多くの試練もあろうが国民評議会と連携しつつ国民の声をよく聞いて行きたい。
- ④ 但し、時間もかかるのでしばらく猶予を欲しい。

<アブドゥルラヒム・キープ新・暫定首相（65歳）の横顔>

- ★ 首都トリポリ出身。
- ★ トリポリ大学工学部電気技術科卒業。その後、米国に渡り、南カリフォルニア大学及びノースカロライナ州立大学に学ぶ。1984年12月、ノースカロライナ州立大学から電気工学博士号を取得。
- ★ その後、一旦トリポリ大学に戻り工学部で2年間教鞭を執る。
- ★ 再度渡米しアラバマ大学で教授として教壇に立つ。
- ★ 一時的ながら英国の大学やUAEのアブダビ石油大学でも教えた経験を有す。
- ★ 2011年春、暫定国民評議会に参加。
- ★ 国民評議会のアブドゥルラザグ・ムクタール評議員は新首相について「国内各勢力に受け入れられるテクノクラートだが知的でカリスマ性もある」「イデオロギーを背景とする勢力には属さないナショナリストである」（ワシント

ン・ポスト紙 2011年11月1日)と評している。

- ★ 新首相のその他の評価・見方は次の通りである。  
「学者肌の人物」「人に好かれる人柄を持つ」「ビジネスマン兼学者」「高潔且つ  
温和」「思慮深い」が能弁ではない」

●期限を遵守し解放貢献度・地域バランス配慮型の暫定政府を発足

国民評議会は、2011年11月22日、アブドゥルラヒム・アル・キーブ暫定首相を首班とする内閣を発表し暫定政府を発足させた。国民評議会は前夜(=11月21日)、閣僚の任命に向けた最終的な会合を開いていた。今回の閣僚の任命においては、①期限遵守、②(解放)貢献度重視、③地域性配慮、④世俗派登用、⑤女性尊重、の五つが特徴と言える。

① 期限遵守

11月22日での閣僚の発表というのは、当初言われた11月20日(日)には間に合わなかったとはいえ、国土解放宣言時(10月23日)に宣言した1ヶ月以内での暫定政府の樹立と言う約束を遵守した形となっている。

② (解放) 貢献度重視

トリポリ解放に至る戦闘で大きな役割を果たし、またセイフ・イスラム氏の拘束というお手柄を立てたジントンの民兵組織の司令官オサマ・ジュワリ氏の国防相への任命や、リビア内戦時にカダフィ軍の猛攻で多くの犠牲者を出したミスラタの民兵組織の司令官ファウジ・アブデラル氏の内相への起用の当たりに、カダフィ政権の打倒に際しての貢献度が重視されたことが読み取れる。

③ 地域性配慮

国防相及び内相の任命では、上述した貢献度重視と共に地域間のバランスに配慮した姿勢もうかがわれる。何故ならば、国防相に首都トリポリ南西部の山岳地帯のジントン出身者を選ぶ一方、内相に中部沿岸都市のミスラタの人物を任命しているからだ。こうした地域バランスへの配慮は、外相に大方が予想していたイブラヒム・ダッバーシ国連次席代表を避けてまで、東部デルナ出身のアシュール・ビン・ハヤル氏を登用した点からも明らかと言える。

④ 世俗派登用

今回閣僚に任命された24人を見るとリベラルな世俗派が多勢を占めている一方、明確なイスラム主義者と見られる人物は任命されていない。これは、リビア内戦でイスラム主義者の戦闘員が力を発揮した上に全土解放後の治安維持でも一定の影響力を維持したことや、ジャリール国民評議会議長が新生リビ

アはイスラム法を基本とすると発言したことなどから欧米諸国が懸念を表明したことに配慮した結果と推察される。但し、③で見たように、外相に、イスラム原理勢力の強い東部デルナの出身者を選ぶなどイスラム派への気配りもうかがわれる。

#### ⑤ 女性尊重

任命された閣僚 24 人のうち 2 人が女性（社会相及び保健相）である点からも、新生リビアでは女性と若者を重視するとの解放後の国民評議会の約束が確実に守られていることが分かる。ジャリール議長によるイスラム法の尊重発言で、今後のリビアにおける女性の地位を懸念する声が高まったことに配慮した面もありそうだ。

#### ●首都トリポリの近郊で発生した反カダフィ派戦闘集団による武力衝突

首都トリポリ西方 30km の地中海沿岸部のイマヤ地域において、2011 年 11 月 11 ～ 14 日の 4 日連続で反カダフィ派戦闘集団による武力衝突が発生した。衝突の原因は定かではないが、ウェルシファナ部族が 11 月 11 日、イマヤ地域で独自にチェックポイントを開設しパトロールに当たったことが発端となったようだ。ウェルシファナ部族の戦闘員は、そこからさらに西に 20km 行ったザーウィヤからの戦闘員の武器類を隠匿したり、同地域にあった車両を破壊したり、さらにはザーウィヤの戦闘員を誘拐するなどの行為に及んだという。こうしたことから両派の間で機関銃なども使った戦闘が発生した。

ウェルシファナ部族を代表するムハンマド・サイエフ国民評議会評議員は、今回の事件について次のように論評している。

- ① 攻撃はイマヤ軍事基地を管理したいザーウィヤ戦闘員によるものである。
- ② 彼らは親カダフィ戦闘員が同地域にいるとの誤った噂に動かされた。
- ③ ザーウィヤ戦闘員は、市民の自宅に押し入ったり、車を奪ったりする口実としてウェルシファナ部族が親カダフィとの宣伝を行った。
- ④ それは誤った噂であり、国民評議会が事態の鎮静化に努めている。

ウェルシファナ部族の出身である国民評議会のファトヒ・アヤド司令官は「国民評議会が双方の指導者たちを集めたので近いうちに停戦となろう」（同上）と語り、戦闘は同日（＝ 11 月 12 日）中にも止むとの見通しを明らかにした。さらに、ウェルシファナ部族を代表するムハンマド・サイエフ国民評議会評議員も「ムスタファ・アブデルジャリール国民評議会議長が、11 日夜から 12 日にかけて数時間に亘る交渉に参加したので事態は解決される」（同上）と語り、13 日までには停戦となるとの見方を示した。

因みに、アブデル・ハキム・ベルハジ国民評議会軍事委員会委員長は、11月11日の時点で「古くからの確執が蒸し返された」「両部族間に和平委員会を創設する」（ロイター通信 2011年11月12日）と語り、かねてからあった両派の怨念を押さえる者がいなくなった状況下で爆発した事件であることを改めて認めている。

### ●課題は部族間の争いや地域間の対立の抑制

一見順調に滑り出したかに見える新生リビアだが、他方では、部族間の争いや地域間の対立が顕在化するなど今後の難しさも浮き彫りとなっている。特に、ここに来て改めて明らかとなったのが、部族・地域間の不信感の強さとそれに起因する復讐劇の発生である。以下では、幾つかの事例を紹介することとしたい。

<国民評議会から距離を置くベルベル族>

ファトヒ・ベン・ハリーファ氏と言え、反カダフィを貫いてきた人物として知られるベルベル族のリビア人である。リビアからモロッコに逃れ16年間暮らしていたが、刺客が迫ったことからオランダに避難していた。1995年にはパリに本拠を置く世界ベルベル会議議長に選出されている。そのファトヒ・ベン・ハリーファ氏は、ベンガジほかでの反カダフィ・デモが起きるやチュニジアに飛び反カダフィ運動を再開した。その後、国民評議会に加わり、国際的な支援を得るべく海外での説得にも当たってきた行動派である。だが、そのファトヒ・ベン・ハリーファ氏は、2011年8月、国民評議会と袂を分かった。その辺りの経緯とベルベル族と国民評議会との関係について、同氏は以下のように語っている。

- ① 2011年8月6日に制定された国民評議会の憲法草案は、ベルベル族について何ら言及していない。言語も存在すらも認めていない。今は安定が第一なので、そうしたことは後で議論しようと言う。存在すら認定されていない国家で、どのようにして市民でいられると言うのか。
- ② 自分は国民評議会の代表と欧州、アフリカ諸国を廻り承認を求めてきた。内戦状態にあったのだから我々は結束していなければならなかった。だが新しい憲法がベルベル族を完全に無視していることを知った時、最早彼らと一緒にはいられないと悟り8月20日に関係を断った。
- ③ 国民評議会は一ベラルで開かれた心の持ち主とのイメージを植えつけようとしている。だが現実には、彼らの大部分は同じ権威主義的な古い手法にしがみついている。彼らはリビアの情勢が如何に危ういものとなっているのかに全く気づいていない。
- ④ 我々は、宗教面からもナショナリスト的な角度からも、漸進的政治を断固拒否する。問題の根源は、国民評議会がアラブ・イスラムのイデオロギーに固執しているところにある。
- ⑤ 新生リビアはイスラム憲法に根付いている。イスラム政党は民主憲法に基づく限り問題にはならない。だが国民評議会は民主憲法を求めていない。イスラ

ムは、イラン、サウジアラビア、アフガニスタン、パキスタン等々、国ごとに異なっているというのに、彼らはイスラム法について話している。

<近郊のタワルガを破壊するミスラタ部隊>

内戦の終了後、幾つかの集団的復讐劇が伝えられる。そうした中で、最も組織的且つ残忍と思われるのがミスラタの戦闘員たちによる近郊のタワルガ住民に対する暴力行為のようだ。

消息筋によれば、ミスラタ近郊のタワルガの住民たちは内戦の終了後も自分たちの町に戻ることを許されないと言う。加えて、ミスラタの戦闘員たちがタワルガの住民をリビア中で追いまわし逮捕したりミスラタの難民キャンプで逮捕したりして、ミスラタで投獄しているともいう。 10月最終週には誰も戻って来られないようにと家屋に火をつけ始めている。こうしたことから消息筋は、ミスラタ戦闘員がタワルガで行っていることは、無法な新生リビアにおける時限爆弾となると見る。人権ウオッチのサラ・リーフ中東北アフリカ局長も「どのような理由があれタワルガ住民に対する復讐はリビア革命の目標を台無しにするものだ」（<http://www.bbc.co.uk/news/world-africa-15517894>）と論評している。

因みに、ミスラタの戦闘員がタワルガの住民に残酷な仕打ちを行っているのは、残忍なミスラタ攻撃を行ったカダフィ軍がタワルガを拠点としていたことや、カダフィ軍の兵士によるミスラタ住民に対する暴行にカダフィ政権に忠実なタワルガ市民も加わっていたと見られているためである。尚、タワルガ市民の大半はアラブ人ではないリビア国民で、先祖はアフリカから連れてこられた奴隷たちと言われる。

<怒りに燃えるシルト市民と復讐を誓うバニ・ワリッド市民>

シルト市民はミスラタに対する怒りに燃えている。ミスラタからの戦闘員がシルト市内で乱暴・狼藉の限りを尽くしたからだ。とりわけ、ミスラタからの戦闘員がカダフィ大佐の母親であるアイーシャ・ビン・ニラン女史の墓を荒らしたとの噂が広まったことがミスラタへの怒りを憎悪に変えてしまったようだ。

シルト市の郊外の村落では、家屋を壊され、行き場を失った数百もの家族が親戚を頼ったり、或いは砂漠の中にテントを張りながら暮らしている。彼らは、反カダフィ派の戦闘員が戦闘の終了後も家屋に火をつけたり、略奪したり、資産を奪ったりしたと証言している。シルトのハッジ・アブ・ムハンマド氏は「部族の長老がカダフィ大佐の遺体を引き取りに行ったところ、ミスラタの人々は引渡しを拒否した」「その上、彼らはカダフィ大佐の遺体はイスラム教

徒のところには埋葬してはならないと言った」「我々はシルトに墓穴を用意していたのだが彼らは否と言った」（ロイター通信 2011年 11月 4日）と語り、ミスラタに対する怒りを露にしている。

同じようなことはバニ・ワリッドでも起きている。但し、ここで乱暴・狼藉を働いたのはザーウィヤからの戦闘員であった。バニ・ワリッドでも、制圧された 10月 17日以降、多くの略奪や暴行事件が起きている。バニ・ワリッドとザーウィヤの折り合いが悪いのには理由がある。2011年 3月、ザーウィヤでも反カダフィを叫ぶ市民の抗議デモが発生した。その時、反乱を押さえ込んだのはワルファラ族が中心をなす部隊であった。周知のように、そのワルファラ族の多く居住するのがバニ・ワリッドである。

ワルファラ族の長老たちが反カダフィ派の包囲する中、最終的には上手く行かなかったとはいえ調停を行おうとした時に頼ったのは西部山岳地帯の町ジャドゥの戦闘員たちであった。バニ・ワリッドがミスラタとは歴史的に不仲であり、ジンタンともライバル関係にあることを考えれば当然の選択であった。付け加えれば、ジャドゥとジンタンは同じ西部山岳地帯のライバルであり、今も首都トリポリの海岸地帯を分割警護しながら角を突き合わせていると言う。

#### ●ザーウィヤで部族会議を開いた国民評議会

国民評議会は、2011年 11月 26日、先般武力衝突の発生した首都トリポリ西方のザーウィヤで暫定政府への支持を集めるべく部族会議を開催した。今回の部族会議は同日から三日間開かれる。リビアでは 11月 24日に暫定政府が正式に発足した。しかし、各地方や部族による中央政府への支持が十分でないこともあって武器類の回収が予定通りに進んでいないなか、各地の戦闘集団同士の争いが時折り起きるなど治安の回復に手間取っている。

リビアでは、現在でも部族間の争いごとは部族長同士の話し合いで収められるという社会的慣習が色濃く残されている。今般、国民評議会がわざわざ部族会議を開いたのは、そうした慣習・伝統を逆に使うことで今後の統治を円滑に進めようとの意図があると推察される。

トリポリ近郊のムサラタ町から今回の部族会議にやってきたラミン・ムハンマド・アル・ファルジャニ氏は「リビアは部族社会である。私の部族には 14の支族ある。しかし、私が一つの言葉を話せば、誰もが従う」「仮に年長者が命令すれば、全ての武器類は（当局に）手渡される。それにより（回収の）過程は加速化するだろう」（ロイター通信 2011年 11月 26日）と述べ、部族社会であるリビアでは武器類の回収も部族の年長には絶対服従という慣習を使えば上手く行くと説明している。

●首都トリポリで宣誓式を行った暫定政府の新閣僚たち

アブドゥルラヒム・アル・キーブ暫定首相と同暫定首相に任命された新閣僚たちは、2011年11月24日、ムスタファ・アブデル・ジャリール国民評議会議長の前で宣誓式を行った。まずアブドゥルラヒム・アル・キーブ暫定首相は、同議長の前で全力を尽くして職務に当たるとの宣誓を行った後、イスラム教の聖典「コーラン」の上に片手を置き、革命の目的に忠誠を尽くすことを誓った。

また、同暫定首相は「我々は眼前に感動的な7ヶ月があることを期待している。多くのことを行わねばならないが、結果が良くなることを願っている」（AP通信 2011年11月25日）と語り、自分も閣僚たちも高揚感を覚えており、2012年6月に予定される選挙に向けてリビアを率いることを楽観視していると語った。その後、新閣僚たちが同じようにムスタファ・アブデル・ジャリール国民評議会議長の眼前で宣誓式を行い、同議長と力強く握手していた。但し、国防相を含む一部の閣僚たちは、職務の必要上でトリポリにいないことや個人的な行事を理由に宣誓式を欠席している。

アブドゥルラヒム・アル・キーブ暫定首相は、11月22日、閣僚名簿の発表に際して、「私は皆さんに、新政権が全てのリビア国民を代表するものであることを保証する」と述べ、暫定政府が全リビア人を代表するものであることを保証した。

●小規模な抗議デモを行った一部の少数派部族

キーブ暫定首相の言葉にも関わらず組閣翌日の2011年11月23日には、早くも一部少数部族などが不満を表明しデモを行っている。例えば、反カダフィ闘争の発端となった東部ベンガジでは、同日、ベルベル族やマガリバ族の市民が「よそ者の政府は駄目だ」と書かれた垂れ幕を掲げながら、自分たちの代表が新政府に入っていないことに強く抗議するデモを行っている。同じようなデモは、小規模ではあるものの、やはりベルベル族の居住するナフサ山岳地帯の町ジャドゥでも起きている。ジャドゥのデモ隊は、ベルベル族の代表が閣僚に任命されなかったことに抗議するために首都トリポリに行き入り込みを行うと息巻いている。

他方、暫定政府からは外された形のイスラム派は今のところ平静を装っている。イスラム勢力は、暫定政府の期間が2012年6月までの限定期間だけのものである点を理解しており、むしろ、その後の議会選挙や本格政権の樹立時に自分たちの影響力を行使することを目指しているふしがうかがえる。

ところで、何よりも暫定政府の今後の厳しさを示しているのが、暫定閣僚の発表されるまで財務・石油相を務めていたアリ・タルフーニ氏の記者会見での



辛辣な論評である。首都トリポリでは上述のように 11月 24日、新閣僚たちの宣誓式が行われたが、タルフーニ氏は、その僅か数時間後、次のように語り暫定政府の前途が決して容易ではないことを示唆している。

- ① 今、我々が耳にする声は、「エリートの声」「国民に選ばれていない国民評議会の声」「外国から資金・武器を受け取り宣伝された人たちの声」である。
- ② 今や庶民の声を聞く時である。我々は民主的憲法運動を始める必要がある。
- ③ 自分は新内閣に入ることを求められたが、過渡期という課題のあることや自由に発言したいと考えたので辞退した。
- ④ 自分はリビアの主権の危険を感じるし、リビア国民の富への脅威を感じる。
- ⑤ 自分は経済問題を大きな課題と受け止める。
- ⑥ 国民評議会は国内で大手を振る戦闘部隊を国軍に編入することに失敗した。
- ⑦ 石油施設の安全は大きな問題だが、新政府がこれを真剣に取り上げるよう望みたい。

● 暫定政府への協力を惜しまないと語ったアブドゥル・ハキム・ベルハッジ・トリポリ軍事委員会委員長

イスラム主義者と言われるアブドゥル・ハキム・ベルハッジ・トリポリ軍事委員会委員長は、2011年 11月 28日、首都トリポリの業務用の本部の置かれた豪華ホテルの一室で、国防相になるのではと噂されながら入閣しなかった暫定政府に協力を惜しまないことを明らかにした。同委員長の同日の主な発言内容は、以下の通りであった。

- ① 自分の支持者たちは閣内に入らなかったものの暫定政府を支持して行く。
- ② 自らが指揮する部隊がいつ武器類を手渡すのかは現時点では言えない。
- ③ 自分は自分自身を如何なる閣僚ポストにも推さなかったが、重要ポストに誰をつけるのかの相談は受けた。
- ④ 自分は暫定政府が職務遂行上、必要となるあらゆる支持を得られることを望む。
- ⑤ 自分は暫定政府の閣僚の任命が地域配分の観点から均衡していないとの不満の声は聞いた。
- ⑥ 但し、我々は暫定政府が国家の安定と安全のために義務を遂行するのを許されることを望む。
- ⑦ 革命を行った者として、我々は暫定政府及び国防相を含む全閣僚を支援したいと思っている。
- ⑧ 我々は国防省に協力し協調して行く。我々と国防相（大臣個人）との関係は良好である。

尚、数十人の聖職者と宗教指導者たちが集まり、新生国家の憲法をイスラム法に基づくものとすることを求めている。具体的には、2011年 11月 28日、イスラム関係省がトリポリで主催した会議に約 250人のイスラム関連の指導者たちが参集し、暫定政府の指導者たちに、1) 部族間の緊張の緩和、2) 自らをムジャヒディンと呼ぶ民兵組織の武装解除、を訴えている。

● アブドゥル・ファタハ・ユニス・リビア反政府軍最高司令官の暗殺事件にアリ・イサウイ前暫定副首相が関与か？

国民評議会のユーセフ・アル・セイフル軍検察庁長官は、2011年11月28日、記者会見を行い、2011年7月28日にアブドゥル・ファタハ・ユニス・リビア反政府軍最高司令官の暗殺事件に、アリ・イサウイ前暫定副首相が関与していると発表した。

国民評議会のムスタファ・アブデル・ジャリール議長と共に記者会見に臨んだ同長官は、次のように語った。

- ① 捜査の結果、第一の容疑者はアリ・アブデルアジズ・サアド・アル・イサウイ前暫定副首相である。
- ② アブドゥル・ファタハ・ユニス・リビア反政府軍最高司令官の暗殺事件では7人の関与が疑われている。
- ③ このうちの3人は拘束され、残りの者については治安部隊が行方を追っている。

他方、主要な容疑者と名指しされたアリ・イサウイ前暫定副首相は、リビアのアワレン・テレビ局による電話取材に対して、「自分はアブドゥル・ファタハ・ユニス・リビア反政府軍最高司令官の暗殺に関する如何なる書類にも署名していない」「リビアの誰もが真実を知りたがっている」（ロイター通信2011年11月30日）と答え、事件への関与を全面否定している。

● 暫定政府の成立後も依然回復しない治安情勢

<ヘフタール軍司令官一行を攻撃したジンタン旅団>

リビア国軍のアブデル・ラジク・エル・シバヒ報道官は、2011年12月11日、次のように語り、トリポリ国際空港の警備に当たっているジンタン旅団がヘフタール軍司令官一行を攻撃したことを明らかにした。

- ① 西部山岳地帯出身のジンタン旅団が、12月10日、二度に亘りヘフタール軍司令官一行の車列を攻撃した。
- ② ジンタン旅団の戦闘員たちはヘフタール司令官を暗殺しようとした。
- ③ 二度目の攻撃時には一人が死亡し四人が負傷した。
- ④ ジンタン旅団は国軍が空港を警備する彼らの攻撃に来たと勘違いした。
- ⑤ ジンタン旅団は司令官一行の車列を左右及び正面から狙い撃ちしてきた。  
ジンタン旅団のハーリド・エル・ジンタニ報道官は次のように反論している。

- ① 我々はヘフタール司令官の暗殺を試みたことはない。
- ② 同司令官一行がやって来ることを事前に知らせなかった国軍に責任がある。
- ③ ヘフタール司令官一行の車列が治安上のチェック・ポイントで停止せず進行

して来たのでジンタン旅団は射撃を始めた。

- ④ 事前の連絡なしに重装備した車列がチェック・ポイントを通過すれば何が起きるのか分かるはずだ。
- ⑤ 国軍が侵略者から空港を防御できるようになればいつでも明け渡す。
- ⑥ 我々は今日に至るも国軍について何も知らない。誰が責任者であり、どこに軍事基地があり、指揮命令系統がどうなっており、我々はどのようにすれば国軍に入れるかなどを全く知らない。
- ⑦ 実際には、いわゆる国軍はまだできていない。

<武装集団に襲撃された検事長>

アブドゥル・アジズ・アル・ハッサディ検事長が、首都トリポリにおいて白昼に武装勢力に襲われる事件が2011年12月7日に起きている。事件の概要を同検事長の説明を基に紹介すれば次のようになる。

- ① 仕事を終えて帰宅しようとしていた時に機関銃を積んだピックアップ・トラックにより行く手を塞がれてしまった。
- ② 男たちがトラックから飛び降りてきて、自分に乗っていた車から引きだし殺人容疑で拘束中の友人の釈放を求めてきた。
- ③ 一人の男の持っていた銃を奪い取って別の男の頭部に押し当てたので、無事にその場を切り抜けることが出来た。
- ④ まだ国民評議会には通知していないが辞職を考えている。
- ⑤ 多くの武装集団が何ら抑制されることなく首都トリポリにいたので、新政府は法の支配を確立できないでいる。
- ⑥ 大半の警察署は閉鎖されたままであり、警察官たちも余りの多くの武装者がいるのでまともに職務を遂行できないと嘆いている。
- ⑦ 各都市からやって来た戦闘員たちは自分たちの囚人を抱え当局への引き渡しを拒否している。
- ⑧ 今回の集団とは別の武装勢力が警察官や刑務所の警備員を脅し、囚人たちを釈放する恐れがある。
- ⑨ 武装勢力は我々を信用していないので独自に囚人を抱えている。

実際、12月第二週には、ミスラタで警察官が旅団の戦闘員を逮捕したところ、その他の戦闘員たちが警察署を襲撃して逆に警察官4人が一時的に人質となるという事件も起きている。

<衝突で殺害されたジャンズール軍事委員会副委員長>

首都トリポリ西方約17kmのジャンズールで、2011年12月2日、ジャンズール軍事委員会副委員長が殺害される事件が発生した。事件が起きたのは同日早朝で、アシュラフ・アブデルサラーム・アル・マルニ・スウェイハ・ジャンズール軍事委員会副委員長が運転手と共にジャンズール市のチェック・ポイントに近づいた時に発生した。因みに、同チェック・ポイントは主としてジンタン出身者で構成する旅団の管理下にある。

アブデルナーセル・フランダフ・ジャンズール地方委員会委員長の説明によれば、事件の概要は次のようなものであった。

- ① 旅団の警備員が、アシュラフ・アブデルサラーム・アル・マルニ・スウェイハ・ジャンズール軍事委員会副委員長の車をチェック・ポイントで停止させた。
- ② 車内から同副委員長が自分はジャンズール軍事委員会副委員長であることを告げた。
- ③ 警備員は、我々はジャンズール軍事委員会など気にしないと答えた。
- ④ その上で、警備員は運転手に車外に出ることを求めた。
- ⑤ 同時に、彼らを目がけて射撃が行われたため、副委員長は殉教者となり運転手も軽傷を負った。

アブデルナーセル・フランダフ・ジャンズール地方委員会委員長は、この焼き討ち略奪事件について次のように述べている。

- ① 革命の戦士たちの悪口を言うつもりはないが、現実には、一部の者は無法者ということだ。
- ② カダフィ支配が終わったと思ったら戦闘員たちの人質となったことに驚いている。占領と言っても大げさではない状況だ。
- ③ 彼らは出身地に戻り、その治安の確保を図らねばならない。
- ④ そうすれば、ここで起きたことはもう起きないであろう。

トリポリ委員会は、2011年12月6日、戦闘員たちに12月20日までに故郷に戻り、トリポリ旅団も12月31日をもって解散することを明らかにした。しかし、果たして予定通り進むのか今後の行方が注目される。

● 100日での軍・警察の確立や地方分権の推進を約束した国民評議会

国民評議会は、2011年12月3日、カダフィ大佐後時代になって初の国民和解会議を開催した。同会議に出席したアブデル・ジャリール議長は「リビアでは我々は全てを吸収できる。リビアは皆のためのものだ」「カダフィ軍が我が国の諸都市や、村落、兄弟たちに何をしたにせよ、我々は彼らを許す用意がある」「我々は許し、耐え忍ぶことができる」（同上）と発言し、カダフィ軍の兵士を咎めない考えを披歴した。このほかジャリール議長は、声明の中で、以下についても明らかにした。

- ① 私はリビア国民に多くがなされることを保証する。我慢していて欲しい。
- ② 国民評議会はウェブサイトを開設し、メンバーを紹介すると共に、活動状況も明らかにして行く。
- ③ 国民評議会は反カダフィ派部隊の社会への融合に最優先順位を置いている。
- ④ 国軍と警察、国境警備隊を100日以内に確立するとの目的が達成できれば、国民にも政府にも偉大な成果ということになる。
- ⑤ 人口及び内戦での被害状況に応じて予算が各都市及び地域委員会に配分される。分権化努力の一環として、独自の予算を持つ約50の地方委員会及び管理

事務所が設置される。

- ⑥ 国権を分散化することを目的に省庁も地方都市に再配置される。

因みに、アブデルラジク・アル・アルディ国民評議会トリポリ代表は、主要省庁の地方都市への配置について次のように語っている。

- ① 国民評議会はベンガジがリビアの経済ハブとなることを決定した。経済省と石油省がベンガジに置かれる。
- ② ミスラタはビジネス・ハブとなり財務省が置かれる。
- ③ 東部ダルナには文化省が置かれる。
- ④ その他省庁の大半はトリポリに置かれる。

またハリーファ・ヘフタール国軍司令官は、国軍の再興について、「100日という時間は新たな募集や訓練・再編に十分な期間である」「但し、リビアが広大な国境地帯を自衛できるようになるには、少なくとも3～5年が必要である」（AP 通信 2011年 12月 13日）と述べ、自衛可能な国軍を作るには時間を要することを説明している。

## <経 済>

### ●一部の例外を除き制裁を解除した国連安保理及び米国政府

国連安全保障理事会は、2011年12月16日、リビア中央銀行及びリビア外国銀行（LFB）に対する制裁を解除した。但し、カダフィ大佐一族及び旧リビア政府高官の資産は引き続き凍結扱いとされる。因みに、リビア制裁委員会のホセ・フィリペ・モラエス駐国連・ポルトガル大使は、1週間前に、反対の表明のない限りリビア制裁がニューヨーク時間の2011年12月16日午後5時をもって終了すると安全保障理事会理事国に通知していた。

2011年9月に採択された国連決議はリビア国营石油会社を対象から外す措置を取ったものの、リビア中央銀行とリビア外国銀行は資産の所有者を巡る法的問題が残されていたため解除扱いとはならなかった。それでもリビア制裁委員会は2011年11月下旬までに約180億ドル相当の資産を解除したものの、実際にリビア政府が利用可能となっていたのは30億ドルに留まっていた。

リビア暫定政府は2011年12月第二週、ムスタファ・アブデル・ジャリール国民評議会議長、サディク・オマル・アルケベル中央銀行総裁、アブドゥルラヒム・エル・キーブ暫定首相、ハッサン・ジグラム財務相の連名で国連安保理リビア制裁委員会に書簡を送付し、「凍結資産の解除はリビア経済の安定、銀行部門での信頼感の回復、国内外銀行取引の円滑な遂行、新生リビアの社会・経済安定にとって不可欠である」と述べ、資産の早期凍結解除を訴えていた。

国連安保理のリビア制裁の直後には米政府もリビア制裁の解除を、やはり一部の例外を除いて解除することを発表している。ホワイトハウスの発表した声

明は「米国はリビア政府及びリビア中央銀行の資産を司法権の及ぶ範囲において解除する」「こうした政策は、リビア親政府が移行及び復興を責任ある方法で遂行する上で助けとなろう」「但し、カダフィ大佐一族及びカダフィ政権高官の資産は引き続き凍結される」（ロイター通信 2011年 12月 17日）と述べている。米財務省は制裁時に 300億ドル超のリビア政府資産を凍結したとしていた。

尚、英国のウィリアム・ヘイグ外相は、国連安保理によるリビア制裁の解除について、「今回の措置はリビアの移行政府にとり新たな大きな瞬間である」「制裁の解除は、今やリビア政府が巨額の資金を完全に入手することができ、国家を復興させることが可能であり、安定を確保し、日常生活に不可欠な取引を行えることを保証するものである」『英国も国内で凍結中の 65億ポンドの凍結を解除する』（<http://www.bbc.co.uk/news/world-africa-16228845>）と述べ、英国も凍結資産を解除することを明らかにしている。

●内戦の経済損失額は約 350億ドルだが産油量の増加で経済も回復すると予測する国際通貨基金（IMF）

国際通貨基金（IMF）は、2011年 10月 26日、アラブ首長国連邦（UAE）のドバイで「地域経済見通し（Regional Economic Outlook）」を発表し、リビアについては、内戦の経済損失額は 2010年 713億ドルの国内総生産（GDP）のほぼ二分の一に当たる約 350億ドルだが産油量の増加で経済も早期に回復するとの見方を示した。

IMFのマスード・アフメド中東・中央アジア局長が、同日明らかにした諸点は次の通りであった。

- ① 暫定政府は産油量が 2012年下半期には内戦前の水準に戻ると見ている。仮に、そうなるとすれば、我々はリビアの経済が 2012年に早期に回復するのを目にすることになる。
- ② リビア経済は 2011年に約 50%縮小することになる。主として経済の約 70%を構成する石油及び石油関連部門がほぼ完全に停止した結果である。
- ③ 非炭化水素部門でも大規模な阻害が発生した。因みに、非炭化水素部門は 2011年に規模を約 30%縮小させた。
- ④ 巨額の黒字を計上してきた財政収支と経常収支も、2011年には巨額の赤字に転落する。
- ⑤ しかし、治安の回復とともに非炭化水素部門の経済活動も早急に回復しよう。非炭化水素部門は 2012年には約 20%拡大しよう。
- ⑥ IMFはリビア経済の 2012年については、治安が回復し政治が機能するようになれば、急速に回復すると見ている。
- ⑦ 凍結中の在外資産の解除も経済の回復に貢献するだろう。解除された資産は最も必要とされる支出を補填することになる。
- ⑧ リビアが内戦で被った経済的損失額は約 350億ドルと推計する。
- ⑨ 現時点では IMFはリビアから金融支援の要請を受けていない。リビアが IMFの金融支援を必要とするのか否かは依然明らかではない。

- ⑩ 但し、リビアには過去から蓄積してきた国際的な資産があるし、回復する石油生産に頼ることも出来るだろう。
- ⑪ 全ては石油生産の回復や凍結解除の資産がどの程度早く利用可能となるかである。

●本格政権成立前には経済面の主要な決定は行われないと見るアリ・タルフーニ財務・石油相

アリ・タルフーニ前財務・石油相が、2011年11月10日、今後の経済運営などについて次のように語り、本格政権成立前に経済面の主要な決定が行われることはないことを明らかにした。

- ① 暫定政府が主要な経済面の決定を行うことはないだろう。暫定政権の任期は8ヶ月であり、大規模インフラ事業の大半は憲法が制定され、選挙で選ばれた政府のできてからのこととなる。
- ② 暫定政府はその権限を与えられていないので、主要な経済改革は本格政権の成立する2012年夏以降となる。自分は、この暫定政府が、例えば、新たな石油権益を与えることはないと考え。
- ③ 選挙で決まった新政府がリビア経済の多角化や民間部門の強化を図ることとなる。
- ④ 今こそ歳入源の多角化を図る時である。将来の主要な歳入源は観光と金融サービスとなる。自分は、それがリビア経済にとっての大きな戦略的シフトとなると考える。
- ⑤ 選挙で選ばれた新政府がこの問題を真剣に受け止めると共に、それを信じる人材が十分に出てくることを望みたい。
- ⑥ リビアは非再生可能エネルギーを使用してきた。だが埋蔵量がどの程度あるのか分からないので早晩使い果たすかもしれない。
- ⑦ アルジェリアを含む近隣諸国に逃亡したカダフィ一族は、巨額の公金を持ち出したと考える。カダフィ大佐と一族はリビアを私的な銀行のように使っていた。国営石油公社（NOC）には知られた口座が8つあったが、カダフィ政権の崩壊後、さらに秘密の口座が20もあったことが判明した。

●資産の運用状況や今後について説明したリビア投資庁（LIA）の最高経営責任者（CEO）代行

リビア投資庁（LIA）のラフィク・ナイード最高経営責任者（CEO）代行（43歳）は、2011年11月上旬、これまで秘密のベールに包まれていた資産の運用状況について明らかにすると共に、当面の経営方針について簡単に説明した。

- ① 自分は近い将来にリビア投資庁の資産は急減すると考える。
- ② （何故ならば）自分としては、近い将来に大規模投資が必要であり、石油生産が完全に復帰していないので海外資産はそのため使用されると感じている（からだ）。
- ③ 2011年6月時点での運用資産額は649億ドルで、そのうちの45.5%は現金である。運用資産の約77%は現金・株式・定収入商品で構成されている。
- ④ 我々は世界銀行国際通貨基金（IMF）とリビア投資庁としての最適規模に関



する作業を行っており勧告案を作成する。

- ⑤ カダフィ政権時代の投資を見直すリビア人による金融専門家チームの作業の終わるまで、投資の組み替えは行わない。
- ⑥ 運用資産のうち83億ドルが戦略的株式に投資され、その中の50億ドルがリビア・アフリカ投資ポートフォリオ (LAP) によるものである。
- ⑦ アフリカ6カ国で事業を展開するLAPグリーン・ネットワークは、連制裁の煽りを受けて10億ドルがデフォルト状態となっている。現時点では同社をどうするか最大懸案事項の一つである。我々は同社の損失化の最小化に努めている。恐らく20%程度の損失で済むであろう。
- ⑧ その他のアフリカ投資は、この案件より上手くやっている。北アフリカ及び欧州でホテルを所有するリビア・アフリカ投資社 (LAFICO) は、簿価20億ドルの少なくとも50%の利益を得るだろう。
- ⑨ リビア投資庁の傘下で今一つ上手く行っているのは、アフリカ23カ国で操業しているリビア石油である。同社はアフリカにおける燃料の小売企業である。
- ⑩ 結局、プラス、マイナスを合計すると83億ドルの戦略的株式の現在の資産額は同額程度(83億ドル)になるだろう。
- ⑪ 恐らく将来の運用では、投資の多角化のために石油投資やリビア投資の比率は引き下げられるだろう。

尚、今般明らかになったところでは、主な部門別の投資額は次の通りである。

現金：295億ドル、株式：108億ドル（エネルギー株：約20%、金融株：約18%、工業株：約15%）、債券：97億ドル、戦略的株主（株式）：83億ドル、ヘッジファンド、ストラクチャード製品、デリバティブ：43億ドル、その他投資：23億ドル。

#### ●石油行政を新たに担うことになった高官たちのプロフィール

カダフィ政権の崩壊はリビアの石油行政にも大きな影響を与えつつある。これまで国営石油社（NOC）で幹部を務めてきた人たちに新顔が加わり、新たな石油・ガス政策、石油行政の構築に努め始めている。国民評議会はカダフィ政権時代に締結された契約は全て尊重すると発表する一方、外国企業との間で不正はなかったかの観点から各契約を見直すことも明らかにしている。特に、巨額の事業が動いた国営石油社（NOC）やリビア投資庁（LIA）については、過去の契約などを厳格に精査する方針と言われる。

石油・ガス部門での最大の変化は、これまで全てを担当してきたNOCとは別に石油行政を担う石油省を新たに設置したことである。サウジアラビアやアブダビ、クウェイトなどと同じように、今後リビアでも政策案件は石油省が担い、日々の操業事項はNOCが請け負うとの分業体制が確立して行くものと推察される。

2012年6月下旬までリビアの石油行政及び石油・ガスの操業を担うこと

になる要人の横顔を簡単に紹介することとしたい。

役職名	氏名	横顔
石油相	アブドゥルラフマン・ベン・イエザ	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ ワハ石油で勤務後、NOCの要職を歴任し経営委員会委員を務めた後、ENIとNOCの合弁会社に異動。</li> <li>★ 直近は、ENI役員（操業経営委員会委員長）を務めていた。</li> <li>★ 有能だが強い個性を持つと言われている。</li> </ul>
副石油相	オマール・シャマク	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 暫定内閣の発表前、暫定国民評議会がアリ・タルフーニ氏を財務・石油相に任命していた時から副石油相を務めている。</li> <li>★ 日々の操業の責任者。</li> <li>★ 現在は油田の治安確保と石油インフラの修復に注力している。</li> </ul>
NOC 総裁	ヌーリ・ベルイエン	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 暫定内閣の発表前、暫定国民評議会が暫定統治していた時からNOC総裁を務めている。</li> <li>★ 自身は、総裁職を短期で辞任する意向であった。但し、暫定政府期間中は総裁を続けることを求められている。</li> <li>★ 石油技師（エンジニアリング）で、アラビアン・ガルフ石油社（Agoco）及び英国の石油サービス企業テクニカ（Technica）勤務経験を持つ。</li> <li>★ 12月のOPEC総会には、アブドゥルラフマン・ベン・イエザ石油相と共に出席。</li> </ul>
NOC 販売 総支配人	アフメド・シャウキ	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 外国石油企業との2012年の原油契約の交渉責任者を務めた。</li> <li>★ 先般カタールで開催されたガス輸出国会議にリビア代表団として出席。</li> <li>★ NOC勤務が長かったが、シュクリ・ガーネム総裁の就任時に辞し、その後は独立エネルギー・コンサルタントを務めていた。</li> </ul>
AGOCO 会長	アフメド・マジブ リ	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 2012年2月に現職に就任した。</li> <li>★ Agoco財務畑出身である。</li> </ul>

出所：各種資料より作成。

## <資 料>

### ●重要になってくる主要部族の取り扱い

2011年7月28日に暗殺された反政府派のユーニス参謀総長の属していたオベイディ族の指導者アリ・セヌーシ氏は、次のように述べ、暗殺に関する捜査が適切に実施されない場合、自分たち部族のルールに従って行動すると発言し、リビアにおける部族の重みを国際社会に改めて認識させた

(CSMonitor.com 2011年8月25日)。因みに、同部族の長老筋は、部族の掟の方が政府の法律より強力であることを指摘している。

- ① オベイディ部族は、犯人が処罰されずに終わらせないことを誓う。
- ② 我々は我々の権利を尊重する法と適切な審理の行われる国家にいることを望みたい。
- ③ だが我々の正義を我々自身が追及せねばならない場合、我々はそれを行う。

こうした例があるだけに、様々な要求を持つ幾多の部族を束ねることが出来るのか否か国民評議会の統治能力が問われることになろう。政治リスクに関するコンサルタント企業メイプルクロフトの中東アナリストのアンソニー・スキナー氏は「部族・支族・民族集団間の摩擦や争い、特にアラブとベルベルとの争いは懸念材料である」「統治のための公式な制度のないことが今一つの課題である」(ロイター通信 2011年8月26日)と述べ、部族間などの争いが、今後のリビアでは最大の懸念と指摘している。

但し、確かにリビアは部族社会ではあるが、部族の役割は部族構成員の争い

ごとや部族間のもめごとの解決、或いは部族の中の貧者を医療・保険面や教育面で面倒を見るという社会的なものであって政治的なものではなくなってきたと見る向きもある。

リビアの沿岸部分が、歴史的にローマ時代以前から首都トリポリを中心とする「トリポリタニア」と東部の都市ベンガジを中心とする「キレナイカ」に二分されてきたのは事実である。勿論、西部の部族の中にはカダフィ政権に反旗を翻すところもあったが、反カダフィ色は東部の部族の方が鮮明であった。カダフィ大佐を強く支持してきたのは、出身部族のガッザーファと砂漠地帯のフェウザーン地方の往々にしてアフリカ系である南部の部族である。因みに、リビアには約 140 の部族があるが重要なのは精々 30 とされている。以下では、改めて主要部族の特徴を見ることとしよう。

表 リビアの主要部族の特徴

部族名	親・反カダフィ	居住地域	備 考
カッザーファ	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 半は親カダフィであったが、恩恵の少なかった一部は反政府デモの当初から反政府派 支持に回った。</li> <li>★ 一部は政権警護部隊の中核を構成していた。</li> <li>★ 権力を欲しいままにしていると他部族から非難されることもあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 中部シルトからサハラ砂漠にかけて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 小さな部族で、歴史的には必ずしも強力ではなかった。</li> </ul>
ワルファッラ	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 部族の長老が反政府デモの早い段階で反カダフィを公にした。</li> <li>★ 軍に多くを送り込んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 元々ミスラタから出たが、主にトリポリ東方に居住しており、その範囲はシルト近郊にまで及んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 最大部族で部族員は 100 万人と言われる。</li> <li>★ 本部族は、1993 年、マガルハ部族の支援を得て反カダフィ・クーデターを行ったが失敗し、指導者の多くが殺害・投獄・国外逃亡の憂き目を見た。</li> <li>★ 6 支族で構成される。</li> </ul>
マガルハ	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ カダフィ政権とは「親・反」あいまった関係にあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 元々内陸部に居住していたが沿岸部に移住した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 人数面で第二位の部族である。</li> <li>★ 政治面で中枢役</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 1993年の反カダフィ・クーデターに加わったが、秘密交渉の結果、復権しカダフィ大佐との親密関係の維持に成功していた。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 特にかダフィ大佐と軍事クーデターを執行したアブデルサラム・ジャルード少佐は長らく政権のNO.2として君臨し、1972～1978年には首相も務めた。同人は1990年代に入りカダフィ大佐から疎んじられ隠遁生活を送っていた。</li> </ul>
トゥアレグ	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 伝統的に独立を求めて各国政府と衝突してきたが、リビア政府とは対立していない。</li> <li>★ このためカダフィ政権が本部族に武器類を供与し他政府との衝突を煽ってきたのではとの疑いの目で見られている。</li> <li>★ カダフィ政権はリビア国籍以外の同部族員の亡命を認めてきた。</li> <li>★ リビア危機では親カダフィを貫いてきた。そのため、カダフィ大佐は同部族の支配する南部砂漠に逃げ込むことや、同部族との関係を使ってリビアと国境を接する南の諸国に脱出を図ろうとしているのではと疑われている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 遊牧民族のため幾つもの国家にまたがるサハラ砂漠に居住している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ リビア国内部族員は56万人強と推定される。</li> </ul>
ベルベル	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 圧倒的にアラブ人が構成するカダフィ政権では同部族は取り残されてきた。</li> <li>★ このため国民評議</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ トリポリ南西の山岳地帯に居住する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 西部山岳地帯の居住者の約50%は同部族と見られる。</li> <li>★ 国民評議会の憲法草案ではアラ</li> </ul>

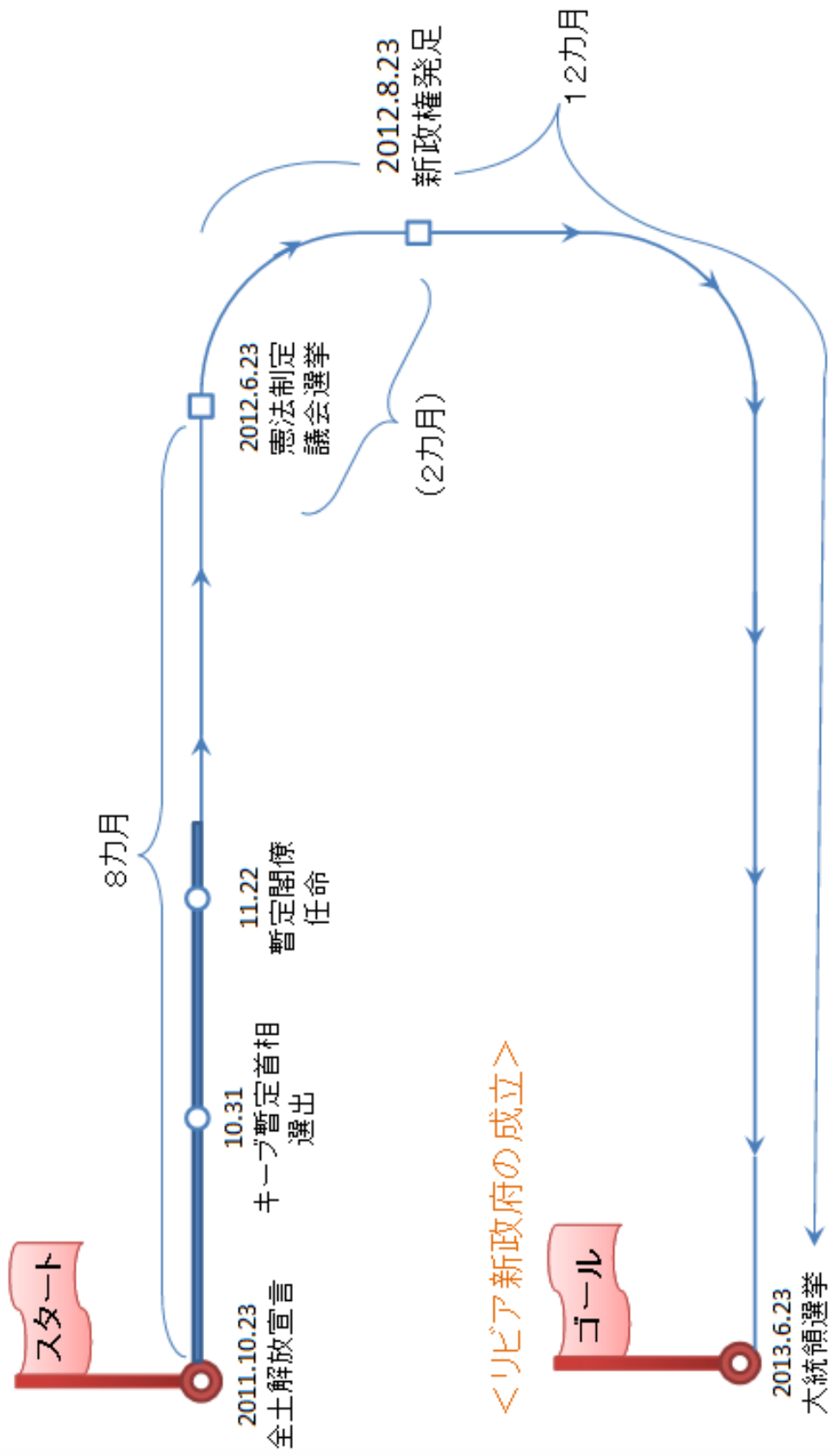
	<p>会は、打倒カダフィに不可欠の同部族に狙いを定めてきた。</p>		<p>ブ人と平等なことが明記されている。</p> <p>★ 但し、今後同部族とアラブ人が再び対立する可能性は残されている。</p>
バラサ	<p>★ 同部族の多くは反政府デモの発生と共に反政府派に走った。</p> <p>★ 指導層も明白なカダフィ支持声明を出すことを躊躇していた。</p>		<p>★ カダフィ大佐の現夫人の出身部族である。</p> <p>★ カダフィ子息の多くが同部族を支援していると言われる。</p> <p>★ 同部族の中には役所の中堅幹部となっている者が少なくない。</p>
ズワイヤー	<p>★ 同部族は、今回の反政府デモの期間中、最も先鋭的な反カダフィ部族であった。</p>	<p>★ 都市部や東部の産油地域、内陸部に居住する。</p>	<p>★ 小部族だが石油収入の配分に関するさい。</p> <p>★ 最大の関心事は石油収入の確保と言われる。</p>
ミスラタ		<p>★ 主に東部に居住する。特に、中部の都市と同じ名前の東部のミスラタを中心に、ベンガジやダルナに広がっている。</p>	
アル・アワキール		<p>★ 東部アル・ベイダに根を張っている。</p>	<p>★ ムスタファ・アブデル・ジャリール国民評議会議長もアル・ベイダ出身である。</p> <p>★ オスマン・トルコ帝国及びイタリアに対する反対運動の中心役を果たしてきた。</p>
オベイダ	<p>★ 同部族の幹部数人が反政府デモの当初から反政府派についていた。</p>	<p>★ 東北のトブルクを中心に居住する。</p>	<p>★ 7月28日に暗殺されたアブデル・ファタハ・ユーニス参謀総長は同部族に属していた。</p>
バニ・ワ	<p>★ 同部族は反政府デ</p>	<p>★ 居住地域はワル</p>	

リド	モ発生当初から軍を離反したと言われる。	ファッラと重複する。	
タルフーナ	★ 同部族は軍に多いが、反政府デモ発生当初から軍を離反したと言われる。	★ 首都トリポリ	★ 首都トリポリの人口の3分の1は同部族と言われる。
ゼンタン	★ 同部族は軍に多いが、反政府デモ発生当初から軍を離反したと言われる。	★ トリポリからチュニジアとの国境にかけて居住する。	

出所：ロイター通信 2011年 8月 26日。

注：同通信によれば、元々の出所は、Stratfor、AKE、メープルクロフト、コントロール・リスクス、ロイター通信である。

# 新生リビアのロードマップ





暫定政権の課題

